



～ 感動の体育大会 ～

校長 小木曾敏樹

天候が心配された体育大会は、朝から快晴。半日間で顔が真っ赤になるくらいの晴天で、10月とは思えないほどの暑い1日になりました。暑い中、熱い苗木中生の頑張りを見ることができました。保護者やご家族の参観者も去年よりも多く、また、ご来賓の皆様も多くの方が最後まで見てくださり、素敵な体育大会になりました。本当にありがとうございました。

体育大会は、間違いなく「大成功」と言ってい。オープニングの DANCE & 学級パフォーマンスも去年よりもレベルアップしていた。「苗中ソーラン」も列移動や構成、姿勢や指先にもこだわりをもって取り組み、これが伝統の「苗中ソーラン」と言えるものになった。競技ではミスもあったけれど、そんなことは大したことではない。ホームページの写真で見れば分かるように、一生懸命が、精一杯が伝わってくる。大縄跳びも、落ち込むクラスはなく、どのクラスも跳べていて、発表を聞くまでどうなるか分からない、いい取組になった。

体育大会はお祭りではない。その日だけの、その日限りの取組ではないからだ。苗木中生がいつも言っている、「行事＝日常」。それをグラウンドで表現できた1日になったのではないだろうか。今度は体育大会を学校生活の日常で表現する番になった。

「やることがあり過ぎて時間が足りないくらい。そんな忙しさが楽しいと感じられる、『変な学校』が、また今日から始まる。また、楽しいことが始まる。」

夏休み明けの「苗木中だより」にこう書きました。その通りになったのではないのでしょうか。そんな君たちだから、体育大会が終わった今、もう既に、合唱祭が楽しみになってくる。保護者の方に言いました。「バスタオル持参でアートピア付知に来てくださいね。」と。



「大成功」よりも価値があった「伝える」こと

とてもいい体育大会だった。しかし、競技よりも、DANCE よりも、ソーランよりも、私の心に強く残っているのは、解団式での「涙」。

去年も3年女子生徒の数人には涙があった。今年も数人だったかもしれない。でも、涙をこらえた生徒、こらえきった生徒は何人もいたはず。私の目には、君たちの中の何人もの仲間の目に、光るものが見えました。解団式で十分に話せなかったこともあったでしょう。短い時間の中で伝えきることはできなかったと思います。でも、伝えようとしたリーダーたちの想いが伝わる解団式だったと思います。

体育大会の練習の中で、3年生が下級生に対して、想いや願いを語った場面があった。指示とか注意とかではなく、想いを語った。各学級が体育大会に関する、「中間振り返り」の学級活動を行った。3年生では、そこでも涙があった。体育大会が終わった翌日、やはり3年生の教室には涙があった。2年生は、2日間に渡って取組を振り返った。

本当の想いを誰かに伝えようとした時、涙が出てしまう。分かってもらえるのか不安な思いから涙が出ることもあるだろう。自分自身との葛藤、自分を自分で責めてしまう想い、そんな涙もあったはずだ。分かってもらえた、分かり合えた、そんな想いが涙になるのは当然のこと。

そんなドラマが、3年生の教室では繰り返されていた。それでいい。それが大切なこと。自分の想いに力をかけて閉じ込めてしまう、そんな悪いクセのある苗木中生だから、自分の本当の想いと向き合って、それを伝えあうことは、体育大会の成功よりも価値がある。体育大会後の3年生の振り返りの一部を紹介します。

○私は体育大会を心の底から楽しめたと思う。自分が嫌いなことも、大好きなことも、全力で取り組むことができたからだ。「楽しむ」とは、全力になって取り組んだ先にあると思う。

○今までは、本音とか、真剣に話したりしたら馬鹿にされるかも・・・とか、嫌われてしまうかも・・・とか思って、本音を話すことに不安な気持ちを抱いていた。体育大会の話し合いでクラスがそういう雰囲気になった時、みんなが本音で語っている姿を見て、自分も本音で話すことができるようになった。

○思っていること全部言えたからスッキリした。話して自分の意見をみんなに伝えることで、みんなに自分のことを知ってもらい、自己表現できたと思う。

○このメンバーで半年過ごしているというのもあるけど、みんなが泣きながら本音で語っている姿を見て、自分も語らなきゃいけないと感じた。

2年生の振り返りでは、3年生に対する感謝や憧れの想いがたくさんあったと聞きました。こんな思いがあったからこそ、3年生は下級生の憧れになる。この想いが、語ることが、新しい苗木中の伝統になればいい。今よりも、もっと「変な学校」になる。

